

ホロライブラバーズ MOD使用トロフィー『天を廻りて朝日は昇る』  
獲得ルート

fruit侍

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

主人公が救われていく感動的だな（U^）な実況、はーじまーるよー。

今回はこちらのゲーム、『ホロライブラーズ』にMODを使用し、その状態でしか獲得できないトロフィーを獲得していきたいと思います。

## 以下注意書。

作者がホロライブを本格的に見始めたのは2022年8月からです。そのためそれ以前にあった出来事などはあまり詳しく知りません。必要であれば自分から調べますが、そこまで詳しいというわけではないことを予めご了承ください。

作者はホロメン全員の配信を毎回見ているわけではないため、キャラ崩壊や解釈違いが起こる可能性があります。〇〇はそんなこと言わない！ と言いたくなることもあるかもしれませんが、『にわかの記事だからこんなもんか』程度に思ってください。

展開の都合上、ホロメンが傷つくシーンがあります。ですが決してホロメンの人格や名誉を貶める目的で行っていないということをご理解ください。

この小説はフィクションです。

参考にさせていただいた作品

62 / <https://syosetu.org/novel/2455>

98 / <https://syosetu.org/novel/2578>

# 目次

入学くバトロワ開始前	1
バトロワ開始前の小イベント	11
v s ホロライブ三期生	19
v s ホロライブゲームーズ	35

## 入学くバトロワ開始前

RTAじゃないけどb i i m式な実況、はーじまーるよー。

今回はこちらのゲーム、『ホロライブラバーズ』で獲得できるMOD  
使用トロフィー、『天を廻りて朝日は昇る』を獲得していききたいと思います。  
使用するMODは、『Monster Hunter MOD』  
です。つまりモンハンシリーズの要素がこのゲームに追加されるっ  
てことになるなあ……。ハンチョウ！

このトロフィーの獲得条件は、

- 1、種族『竜人』（ベース：黒蝕竜）でゲームをクリアする
- 2、卒業までに天廻龍に覚醒する
- 3、ホロメン10人以上と親友以上の関係になる  
とのことです。

調べてみたところ、このトロフィーを獲得している先駆者兄貴がい  
なかったので、私が初めての獲得者になろうという心算です。もし獲  
得しているという兄貴がいらっしゃれば、獲得を証明できる画像をD  
Mで送ってください。

では早速始めていきたいと思います。キャラクリですが、最初に種  
族を選びます。MODを使用した影響でいろいろと増えてますが、ト  
ロフィー獲得条件的に選べる選択肢は一つです。はい、皆さんお察し  
の通り『竜人』を選びます。

そしてここからが本題です。このMODを使用した上で種族『竜  
人』、『獣人』、『魚人』を選んだ場合は、ベースとなるモンハンのモン  
スターを選ぶことができます。といっても流石に古龍は選ばま  
せん。なんでも、開発段階ではあったらしいんですが、テストプレイ  
で難易度『オーデিশョン』が、難易度『イージー』の通常プレイよ  
りも簡単にクリアできちゃってゴリゴリのヌルゲーになっちゃった  
ので消されたらしいです。そりゃ消されて当たり前だよなあ？

今回私がベースにするのは、『黒蝕竜 ゴア・マガラ』です。

あれ、ゴア・マガラって成長したら古龍になるやん、簡単になるく  
ね？ とお思いの方もいらっしゃるでしょう。

そう思つてゴア・マガラを選んだ方は、100%地獄を見ることになるります。

理由はいろいろありますが、ここで長々と語るとゲームが進まないで、説明するべき時が来たときに追つて説明していききます。

次に名前ですね。名前は適当に禍津天神まがつてんしんとでもしておきます。ホモじゃないやん！ って？ RTAじゃないからね、仕方ないね。

そしてスキルです。本来ならガチャ方式で決まるスキルですが、このMODを使用して先程私が言った3つのいずれかの種族で始めた場合、何のモンスターを、何の種類をベースにしたかによつてモンスター固有スキル、種固有スキルが初期スキルとして確定します。今回はゴア・マガラをベースにしたので、

『狂竜ウイルス』

『飛行』

の2つが初期スキルとなります。3つじゃないのは、モンスター固有スキルが強すぎるからです。

『狂竜ウイルス』は言わずもがなゴア・マガラの操る狂竜ウイルスを扱える、モンスター固有スキルです。

『飛行』名前の通り飛ぶことができる、飛竜種固有のスキルです。ゴア・マガラは正確には飛竜種じゃありませんが、ま、多少はね？

ちなみに牙獣種、牙竜種なら『体術』、鳥竜種、獣竜種なら『剛脚』、魚竜種、海竜種なら『潜行』のスキルが獲得できます。また、種固有スキルにはデフォルトでスタミナ減少軽減が付いています。こつちも中々に強いんですがモンスター固有スキルが強すぎてねえ……。

それと補足ですが、種固有スキルと種類が一致しないモンスターが存在します。例を挙げるとすればディアブロスとかティガレックスとかですね。ディアブロスに関してはモンスター固有スキルがない代わりに『剛脚』と『潜行』の両方が獲得できます。

最後にホロメンとの関係設定ですが、全MOD共通の代償として、『完全ランダム』です。もう許せるぞオイ！

そういうことなので主に私が決めたのは、名前と種族だけでしたね。では早速スタートです。

さてクソ長opをカットしまして、右下に出ている『now loading』の文字と、箱を運んでる（激ウマギャグ）ホロメンを見ていると会話が始まるはずですが……頼むから普通の家庭に産まれてくれよなく頼むよ。

◁周りの視線。それはどれも病原体を見るかのような不快さを放っている。

◁「なんで皆僕をそんな目で見るの?」

◁物。どれも当たったらただでは済まない物。それらが雨のように僕に襲いかかる。

◁「なんで皆僕に物を投げてくるの?」

◁武装した集団。皆剣や槍を僕に向けて、覚えのないことを叫びながらそれらを僕に振るう。

◁「なんで皆僕を殺そうとするの?」

◁僕が何をしたって言うの?

な

ん

で

?

な  
ん  
で  
？

な  
ん  
で  
？

まあゴア・マガラって時点でそうはいかないって分かってましたけどね（半ギレ）

ゴア・マガラで始めると、狂竜ウイルス関連でなかなか悲惨な過去をほぼ確定で持ってます。そしてその過去は、この一番最初の夢から覚めるパートで少しだけ知る事ができます。禍津君も例に漏れずいじめられてたり、殺されそうになったことがあるみたいですね。

こういうことがあって、ゴア・マガラがベースの主人公は基本的にトラウマスキル『人間不信』を持ってて誰も信用しないので、好感度がめっちゃめっちゃ上がりにくいんです。トロフィー取得条件『ホロメン10人以上と親友以上の関係になる』を達成させる気があるんですかねえ？

お、真つ暗な背景が部屋の背景へ変わりました。どうやら禍津君が目を覚ましたようですね。

＜先程まで眠っていたのが嘘のように、頭が覚醒している。  
＜また昔の夢を見ていたようだ。はつきり言って鬱陶しい。



〽この家に住み始めて一週間が経とうとしているが、布団で寝るというのは未だに慣れない。正直木の上の方が寝心地が良い。

……禍津君、つい最近まで野宿してたんですか？

ですがこれで確定しましたね。禍津君に家族と言える人はおらず、何らかの関わりがあるホロメンも一人もいません。最悪のパターンじゃねえか！（全ギレ）

〽……そういえば、今日から学園に行くんだったな。学校に最後に行ったのは小1の時だから、学校に行くのは約9年振りということになる。正直嫌でしかない。

〽ま、今更つべこべ言ったところで無駄か。それに初日から遅刻したら、あの男から有り難みの欠片もない説教を聞かされる羽目になるだろう。そっちの方が僕としては嫌だな。

〽気は進まないが、学園に出席することにした。

あつ、もう今日から学園なんですね……本来なら学園入学の一ヶ月前くらいから始まるんですが、それは学園入学直後のバトルロイヤルのための準備期間です。それがないとバトルロイヤルでフルボッコだドン！ されてしまうからです。

ですがモンスターベースの種族で始めた場合はその期間がありません。理由は単純に、初期の時点で十分に強いからです。せっかちなホモに優しい設計ですね。

デメリットとしては、入学前にホロメンと会っておくことができなくなるくらいですかね。あれ？ キツくね？

〽食事にしよう。食べるのは……調理するのも面倒だし生肉でいいか。

あ、お食事タイムですね。生肉ウ!? ってなった方のために説明しますと、モンスターベースの種族で始めた場合、食べ物は生だろうか

腐敗していようが毒を含んでいようが猛毒じゃなければ食べても問題ありません。ババコンガだって普通に毒キノコとか食ってますしね。

〈相変わらず生臭いが、慣れている。肉の内部にある骨ごと噛み砕き、飲み込む。

〈そろそろ冷蔵庫の中がなくなってきたな。近いうちに狩りに行かなければ。

この感じだと料理関連のスキル取得はダメみたいですね……（諦観）

〈腹が程よく満たされたところでそろそろ出よう。行き的手段はどうしようか。

↓飛んで行く

歩いて行く

おっとここで選択肢ですか。できれば歩いてホロメンと会っておきたいところですが時間もないので飛んでいくとしましょう。

〈……時間がない、飛んで行こう。

〈外に出て、畳んでいた翼爪を開き思い切り羽ばたく。それだけで僕の体は上空へ浮かび上がった。

〈学園は……向こうの方だったか。

いいなく空飛びてえなく俺もなく。

ちなみにこの移動手段の選択肢はキャラが『飛行』を持っているときのみ発生します。

お、背景が先程と変わり、学園内の背景になりましたね。到着したようです。

〓到着した。学園には既に沢山の人が集まっている。着地したときに少し視線を集めた気がするが、無視しておく。

〓昇降口の前には紙が張り出されている。僕は1年G組だ。席は左斜め後ろ。それだけを確認してから中に入った。誰がクラスメイトかなんて、知っている人なんているわけがないので見るだけ無駄だ。

やっぱり禍津君、他人に興味がないようです。トロフィーがキツイぜ……。

〓教室に入ると、既に十数人の人がおり談笑していた。

〓話しかけられると面倒だ。寝てるふりでもしよう。

あつ、おい待てい(江戸っ子)。プレイヤーの意思を無視して勝手に行動するのやめてくれよ……(絶望)。ここで同じクラスのホロメンを把握しつつ好感度稼ぐつもりだったのに!

〓自分の席に座って腕を組んで寝てるふりをしてっていると、突然誰かに話しかけられた。

や っ た ぜ

不幸中の幸いか、向こうから話しかけてくれました。話しかけてくれたのは一体誰なんでしょうか。

〓「おおい元気か? ……もしかして寝てんの? 入学初日に寝てるやつとか初めて見たんだけど……」

おお、この声は! 私の推しということもあつて関係を持つておきたいので禍津君、起きて!(レバガチャ)

〓まさか寝てるふりをしていても話しかけてくる人がいるとは……。このまま一方的に話しかけられるのも鬱陶しいので、仕方なく

目を覚ます。

◁目の前には、黒い髪の左右に白いメッシュが入っており、犬の耳らしきケモミミがある男が立っていた。

◁「お、やっぱ起きてんじやん。なんで寝てるふりなんかしてんの？」

◁「君みたいな人に話しかけられないようにするため。もつとも、君は寝ていても話しかけてきたけどね」

◁「つれない奴だねえ入学初日だったのに。あ、俺は影山シエンだ。よろしくな！」

ボスキちやく！ ということで最初に知り合ったホロメンは、凍結ジャツカルばぶちゃんこと『影山シエン』ホロスターズ3期生。獣人の国からやってきたマファイアのボス。しえびだったりボスだったりばぶちゃんだったり色んな呼ばれ方をされているジャツカルであり、犬ではない（重要）。ゲームも歌も上手いが、特に演技が上手く、スタこれでの演技は眼を見張るものがある。ちなみにデビューしてからすぐにtwitterの垢が凍結した（生年月日をデビュー日にしたことが原因だとされている）。作者の推し。でした。最初に知り合えたのがボスって最高かよ！

◁そう言つて影山は手を差し伸べてきた。どうする？

↓握手する

馴れ合うつもりはない、と手を払う

無視する

これ選択肢の意味あるんですかい？ 一番上以外論外中の論外なんですが。もちろん選ぶのは一番上です。当たり前だよなあ？

◁「ああよろしく。といっても、これが最初で最後の会話になるだろうけど」

◁「安心しろって。そんなことには俺がさせないからさ」

◁まったく鬱陶しい……。僕はできるだけ誰とも関わりたくないの

に。

《影山シエンと知り合った》

《影山シエンの友好度が上がった》

禍津君の思惑とは裏腹にボスとの友好度はしつかり上がってますね。

友好度は同性との仲の良さ、好感度は異性との仲の良さを表すものです。ボスを嫁にしたい人は女主人公で始めて、どうぞ。

ちなみにボスの席は禍津君の右隣でした。だから話しかけてきたんですね。

〈「お、そろそろじゃね？ えっと……禍津、であつてるか？」

〈……なんで話したわけでもないのに僕の名前を知っている、と思ったが、大方昇降口前に張り出されている紙で僕の名前を見たんだろう。

〈「あつてるよ。それより何の用だい」

〈「もうちよいでバトルロワイヤルの時間だからさ、そろそろ会場に行かないか？」

〈……バトルロワイヤル？

おや？ 禍津君はバトルロワイヤルのことを知らなかったんですか？

〈「バトルロワイヤルって、何の話？」

〈「あれ、知らねえの？ この学園は一年に二回、バトルロワイヤルがあるんだよ」

〈あの男、入学前に話さなかったな。

一応ホロラバ初見の方に説明するとこの学園、ホロライブ学園ではボスが言ったように三年間のうちに計六回のバトルロワイヤルが行われます。一年のうち先にある方が前期バトロワ、後にある方が後期

バトロワと呼ばれています。前期バトロワは入学または進級してすぐ、後期バトロワは夏休み明けすぐに行われます。

前期バトロワは各学年だけですが、後期バトロワは全学年が参加するのでカオスになりがちです。

そして禍津君がちよくちよく話題に出している『あの男』というのは、この学園の学園長であるYAGOOのことを言っているんでしょう。え？ 実在してる人物は出せないって？ 確かに谷○元昭さんという名前の方は実在していますが、YAGOOなんて名前の人は存在しないでしょう？

◀正直もう帰りたいが、この学園に入学すると言ったのは僕なので大人しく参加することにする。

本当ならこのままバトルロイヤルまでいきたいところですが、かなり長くなってしまいましたので、バトルロイヤルは次のパートで。

それではご視聴ありがとうございました。ボスの挨拶で締めます。  
お前たち、Good Luck!

## バトロワ開始前の小イベント

主人公がバトロワのことを知らなかった実況、はーじまーるよー。さて先程知り合ったボスと共にバトロワ会場まで来たところからです。人が多いなあ（小並感）。

＜会場には既に大勢の人がいた。今からこの人達と戦うのかと思うと、余計帰りたくなる。

＜影山はというと、会場に着いた途端辺りを見渡し始めた。後ろでキョロキョロされると、正直気が散る。

＜話しかけようか？

↓話しかける

無視する

これは何やらイベントの匂いがしますね！ ですので迷いなく話しかけます。

＜自分からはあまり話しかけたくないが、仕方ない。

＜「影山、さっきから何をしてるの？」

＜「えつとな、俺の幼馴染もここに合格したからどっかにいるはずなんだけど、いくら探しても見当たらなくてさ」

これは人探しイベントですね。好感度稼ぎとしては結構ベタなイベントです。ボスの幼馴染み……と言ったらあの人しか思い浮かばないですね。

＜「あ、できれば一緒に探してくれないか？ 見た目ですぐ分かるやつだからさ」

＜と影山に頼まれた。どうする？

↓手伝う

断る

こんな手伝う一択やろがイツ!!

〈「分かった。探すだけなら付き合うよ」

〈「悪いな！ とりあえず特徴を教えとくから、見つけたらこいつで教えてくれ」

〈「影山は僕に何かを投げ渡してきた。何やらワイヤレスイヤホンみたいなものようだが……」

《影山組特製通信機を手に入れた》

おお、なかなかのレアアイテムである『影山組特製通信機』が手に入りました。ボスとの友好度がある程度ないと手に入れないアイテムのはずですが、今回はやけにあっさり手に入りましたね。

〈「そいつは通信機だ。頭の中で伝えたいことを念じれば、俺のところに情報が来る。位置情報は常に分かるようになってるから、場所は伝えなくていいぞ」

〈「なるほど、それは便利だ。なぜこんなものを持っているのか疑問に思うが、興味はない。」

〈「それで、探している人の特徴は？」

〈「ああそうだったな。特徴なんだが、頭の左側に捻れた角が一本だけあって、左目に黒色の眼帯をしてるんだ。あと、首にめっちゃ派手なチョーカーとネクタイをつけてる」

ふむふむ、この特徴から察するにあの人でしょう。てかボスの幼馴染なんて一人しかいませんし。

〈「それだけ特徴があればすぐ見つかりそうだ。」

〈「分かった。見つけたら、『見つけた』って念じればいいんだね？」

〈「ああ。じゃ、俺はこっちの人混みを探すから、後でな！」

〈「そう言っつて影山は自分の後ろ側にある人混みの中へ入っつていつて



しまった。さて、僕も探すか。

というわけでここでちよつとしたミニゲームです。ルールは簡単。これから4つのシルエットが出てきます。10秒間だけシルエットの1部を見れる虫眼鏡でシルエットの特徴を見て、これだ！と思つたやつを選びます。

〈探してみたところ、候補になりそうな四人を見つけた。ここでは仮にA、B、C、Dと名付けよう。

〈この中の誰が影山が探している人だろうか？

シルエット達が現れましたね。この時点で角が二本あるCのシルエットは候補から外れます。

真つ黒なシルエットだと見分けがつかないやん！ そう思ったみなさまのため

にここで虫眼鏡の出番です。右下にある虫眼鏡のボタンを押すと、10秒だけシルエット達の黒い場所を虫眼鏡を通して明るくすることができます。『4つのシルエット達を見る時間が10秒』なので、あまり時間は長くないです。ですが先程Cのシルエットを候補から外したので、一つのシルエットに少しですが多く時間を割くことができます。

さて、虫眼鏡のボタンを押しまして、まずは眼帯を確認します。その結果、Bは白い眼帯をつけてたのでこのシルエットは違いますね。

次に首を確認します。正解の方は派手なチョーカーとネクタイをつけているはずです。Aは……つけてないですね。てことでDが正解ですね。

↓D

〈選び直すことはできない。本当にいいだろうか？

↓YES

NO

Yes! Yes! Yes! Yes! ……YES! (承太郎)

◁影山が探していると思われる人を見つけた僕は、影山に言われたとおり通信機に『探してる人が見つかった』と念じた。

◁「オウガ! やつと見つけたぜ〜!」

◁影山は思ったより早く現れた。

◁「おおシエン、お前どこ行ってたんだ? ずっと探してたのに見つからねえから、入学前になんかやらかしたのかと思ったぞ」

◁「こっちのセリフだったの。てかいくらマフィアの一人息子とはいえ、ガキの頃から法に触れることはしねえよ」

◁「影山は今さっきここに来たんだ。だからその前にどれだけ探したところで、見つかるはずがないさ」

◁「そうなのか? ってか、なんかさも当然のようにいるけど、お前誰だ?」

◁「ああオウガ、こいつは俺のクラスメイトで、この学園でできた最初の友達だ」

◁友達になったつもりはないんだが。

◁「禍津天神だ」

◁「そうだったのか。オレは荒咬オウガだ。シエンからもう聞いてるかもしれないが、こいつとは幼馴染なんだ。よろしく頼むぜ」

《荒咬オウガと知り合った》

《影山シエンの友好度が上がった》

《荒咬オウガの友好度が上がった》

はい、というわけで二人目のホロメンは魔界のキュート&ダンデーお兄さんこと『荒咬オウガ』ホロスターズ3期生。魔界生まれの魔界育ちで元軍人。ホロスタでは珍しい低音のイケボ持ちでゲームも絵を描くのも可愛いものも好き。そのイケボから女性に特に人気だと思われがちだが、見ている層はおじさんが一番多いらしい(マネちゃん情報)。うずらの卵が苦手。でした。ついに魔ファイアが揃っ

た！ 喜べ（威圧）

〈「それじゃ、そろそろバトルロワイヤルが始まるようだから、僕はこれで」

〈「ああ待て待て、焦んなって」

〈影山は無事荒咬と会うことができ、用は済んだので別れようとしたところ、影山に肩を掴まれた。まだ何かあるのかと振り向くと、影山が真剣な表情で言ってきた。

〈「禍津、俺達と手を組まないか？」

〈影山に手を組もうと言われた。どうする？

↓受ける

断る

おお、向こうから言ってくれるとは好都合ですね。

バトルロワイヤルはこれと言ったルールがない分、とてもカオスなことになります。歩けば戦いを挑まれ、飛んでたら魔法を打ち込まれ、地中に潜んでたら衝撃で掘り起こされます。周りが敵だらけだからね、仕方ないね。

ただ、味方を作ることはできません。その主な方法が、こんな感じでバトルロワイヤル前に手を組むことを約束する、戦闘中に思わぬ横槍が入ってきた結果共闘する、の2つです。現実的なのは前者で、後者は狙って起こすのはほぼ不可能です。起こったらラツキー程度に思っておきましょう。

禍津君は正直、手を組まなくても十分強いですが、共闘すると獲得経験値が少し減ってしまう代わりに共闘した人物との友好度か好感度がめっちゃ上がります。

トロフィー獲得条件的にこの二人との関係は良くしておきたいので、迷わず受けましょう。

〈正直僕は一人でも全然やれるが、この力をあまり使わなくてよくなるのなら、受ける価値はあるな。できるだけこの力はまだ隠してお

きたい。

〈「分かった。手を組もうじゃないか」

〈「おっしや！ これで勝てるー！」

〈「油断すんなよ、オレとお前はお互いのこと知り尽くしてるが、禍津のことはまだ何も知らないんだからな？」

〈「荒咬は複数人で戦うことの難しさを知っているようだ。」

〈「なら今のうちに知っときやいいだろ。禍津、お前どんなふうになんぞに戦うんだ？ 因みに俺はピストルと格闘を組み合わせた感じ」

〈「影山に戦闘スタイルを聞かれた。何と答える？」

↓翼脚を武器として基本接近戦

空を飛べることを最大限活かした戦闘

特にない

これは戦闘スタイルの選択ですね。ホロメンと手を組むと、連携するためにはホロメンが主人公の戦闘スタイルを聞いてくれる必要があります。ここで戦闘スタイルを答えると、それに合わせてホロメンは戦闘してくれますので、楽に戦闘を進められます。

ただしデメリットとして答えた戦闘スタイル以外で戦ってしまうと、連携が失敗して不利な状況に陥ってしまうことが多々あります。なので基本的に答えた戦闘スタイルでしか戦えないということですね。

『特にない』はメリットもデメリットもあまりありません。自分のやりたいようにやりたい人が選べばいいんじゃないかな（投げやり）

さてゲームに戻りますが、魔ファイアのお二人は接近戦が得意なので、禍津君まで接近戦メインになったら遠距離から一方的にやられる可能性があります。なのでどんな状況にも対応しやすいよう、基本的に空中にいることにします。

〈「僕は影山達に、空を飛べることを話し、それを最大限利用した戦い方をすると言った。」

〈「なるほど、そいつはいいな。オレ達は両方接近戦タイプだから、魔

法が得意なやつと相性が悪すぎるからな。どの距離でもある程度やれるやつがいてくれるとありがたい」

◁「あ、オウガはパワーでゴリ押す脳筋タイプだぜ！」

◁「だから脳筋じゃねえって言ってるだろ！ その気になりや大鎌も使うー！」

◁「じゃあなんでいつもは使わないんだ？」

◁「あれはオレのじゃなくて魔界レンタルだからな。レンタル料バカにならないからあんま使いたくねえんだよ……」

え？ あの鎌マジで魔界レンタルだったんですか!? 何のことか分からない方は『ホロスタ2nd act』で検索して♡ ていうかしろ（豹変）

◁「お、そろそろ始まるっばいぜ」

◁ 影山がそう言ったので辺りを見回すと、あれだけ騒がしかった会場はいつの間にかだいぶ静かになっていた。そして生徒の大半は、突如出現した目の前のスクリーンに釘付けになっていた。

◁ これから何が起こるのかと思っていると、スクリーンに一人の女性映し出された。

◁ 『新入生の皆さん、御入学おめでとうございます。学年主任兼1年A組の担任となりました、友人Aと申します。入学して早々、ここに集まってもらった理由は皆さんもご存知かと思われませんが、新入生対抗バトルロワイヤルを行うためです』

おお、予想はしてましたがA組の担任は『友人A』ホロライブのスタツフで、0期生ときのそらの親友。定時退社ができない典型的な社畜で、エナドリをホロメンから心配されるレベルで飲んでいる。しかしホラーが苦手などの可愛らしい一面もある。好物は激辛料理。こ  
とえーちゃんでしたね！

◁ 『これから皆さんの意識を、仮想空間に送ります。仮想空間ですの

で、周りのことなど気にせず思いっきりやっちゃってください。負けでも意識がここに戻ってくるだけです。ですのでご安心を。ですが痛みは普通感じますので、あまり無茶はしないように』

〈「えー？ 痛えのは嫌だな……」

〈「何日和ってんだ。痛みを伴わねえ戦いなんてあるか」

〈「荒咬の言う通りだ。痛みがない戦闘から得られるものなんて少ない。」

〈『それでは意識を転送します。意識転送魔術、起動！』

〈A先生の掛け声が響くと、床が突然光りだす。床には巨大な魔法陣が書かれていた。会場と言っても戦う場所じゃなくて、戦う場所に移動するための場所ということか。

〈「光量に耐えきれず、僕は目を瞑った。」

いよいよ始まりますね。ですが1回目のバトルロワイヤルは最低難易度ですので、まあ余裕でしょう。

と、短いかもしれませんが今回はここまでにしたいと思います。次回からバトルロワに入っていきます。

それではご視聴ありがとうございました。オウガさんの挨拶で締めます。ありがとサンキュー、またな！

## V S ホロライブ三期生

◁ 瞞越しに光を感じなくなったので目を開けると、何やら荒れ地のような場所にいた。木がほとんど生えておらず、障害物となりそうなものは岩や段差ぐらいいしかない。そして一番気になるのが、僕の周りに誰一人いないということだ。

◁ 周りを見渡して状況把握をしていると、A先生の声が響いた。

◁ 『無事全員を転送できましたので、ルール説明に入ります。これから皆さんには、最後の一人になるまで戦ってもらいます。手を組んでいた人もいたと思われませんが、その場にはあなた一人しかいないはずです。手を組んで戦いたいのであれば、まずは合流するところから始めてください』

◁ バトルロワイヤルといえど、手を組む人が出てくるのはお見通しということか。一部の人間は批判してそうだが、それは自身の弱さを認めていることになる。僕はフェアでいいんじゃないかと思うが、それは別にどちらでもやれるという余裕からくるものだろう。

◁ 『戦闘方法に関して特に禁止しているものはありませんが、あまりにも威力の高すぎる技は仮想空間を歪ませる恐れがありますので、一度目は警告、二度目は問答無用で失格となります』

◁ 『バトルロワイヤルの順位に応じて平常点が与えられますが、同率順位の人達にはその順位の平常点を幾らか減らした点が与えられます。これは人数によって減る量が変わりますので、手を組む人数はよく考えてください』

◁ 『長くなりましたが、これで私からの説明は終了です。皆さんの健闘を祈ります。それでは新入生対抗バトルロワイヤル、始め！』

◁ その声を最後に、A先生のアナウンスは聞こえなくなった。

◁ バトルロワイヤルが始まったようだが……まずはどうする？

↓ 二人を探して自分から合流する

二人が合流してくるのを待つ

ゴア・マガラなのにゴア・マガラらしい戦いがほとんどできない実

況、はーじまーるよー。

さあ始まってしまいました。といつてもやることは、早く二人と合流してモブを倒しまくって順位を上げることですがね。場所がお互いわからないので、待ってたら確実に時間がかかります。自分から探しに行きましょう。

＜移動手段はどうする？

↓走る

飛ぶ

もちろん飛んで行きます。地上からだ時間がかかる上に戦いを挑まれて更に時間がかかってしまいますからね。禍津君がどこまでやれるか分からない以上、リスクは避けたいところ。

＜早く二人と合流するために、飛んで二人を探すことにした。畳んでいた翼脚を開き、思い切り羽ばたく。

＜空から見下ろしてみると、もう既にあちこちで戦闘が起こっていた。

＜この辺りに二人はいないようだ。場所を変えよう。

＜……！ 魔法が飛んできた。僕を撃ち落とす心算らしい。

バトロワ中に空を飛んでいると、こんなふうミニゲームが始まります。飛んできた魔法を避けるというシンプルなものですが、その魔法の量がまあ多いです。しかも魔法ですので、何が飛んでくるかはランダム。レーザーだったり小玉大玉だったり弾丸だったり蝶型だったり……あれ？ 私って今東方の原作やってるんでしたっけ（錯乱）

ま、最初のバトロワですし、難易度はそこまで高くありません。二次創作ですが弹幕ゲーをノーコンクリアしたことがある私にとっては簡単でしたね。



〈まあまあ密度があつたが、手当り次第に撃たれた魔法に当たるほど、僕は間抜けじゃない。さて、先を急ごう。

〈少し時間が経った。早めに二人を見つけることができたが、どうやら戦闘中のようだ。

魔ファイアのお二人を見つけることができましたが、戦闘の最中みたいです。

〈見たところ相手は5人。荒咬はなんとか耐えているが、影山が厳しそうだ。どうする？

↓参戦する

様子を見る

ええ!? ボスがピンチ!? 部下としてボスのピンチを放つとけるわけないでしょ! ほらいクゾー!! (デツデツデデデデ カーン ↑カーンが入っている+114514点

〈荒咬と、荒咬に攻撃を加えようとする銀髪の人の中に突っ込むように落下する。荒咬は防御の構えを取っていたし、大したダメージにはならないだろう。

〈「ッ!? 上から何か来ます! 避けて!」

〈その声を聞いた両者は後ろに飛び退き、その直後に僕が轟音とともに着地する。避けられてしまったか。

〈「よお、随分遅かったじゃねえか……」

〈荒咬は既にボロボロだった。だが辛うじて戦えそうだ。

〈「悪い、少し邪魔が入ってね。まだやれるかい?」

〈「なんとかかな……だがシエンがやべえ。あの銀髪のお嬢ちゃんからドデカいの貫つちまってな……」

〈荒咬の後ろに倒れている影山は、荒咬よりボロボロだった。

〈「荒咬、影山を守って。影山はもう戦えないし、次一発貫ったら影山は間違いない転送される」

……え？

「なっ、お前がどれだけ強えのか知らねえが、5対1は無理にも程があるだろ！ それにあいつら、自分の得意不得意をちゃんと理解してる！ ただ数でゴリ押しそうとするだけのバカとは違え！」

ソーダソーダ！ 5対1とかホロラバにおいて無理ゲーですよ！

「それでも勝てると言ったら？」

「……やれんだな？」

オウガさんもうちよつと粘つてよお！

「僕は無言で頷く。」

「すまねえな……今日会ったばつかのやつのために」

「今の僕がどこまでやれるのか試したいだけだ。君達を助けるのはついでだよ」

「シエンから聞いたけどよ……お前ツンデレってやつか？」

「……」

「余計なことを……」

まあゴア・マガラがベースの主人公は大体が、自分の力で誰も傷つけて欲しくない上に平和に過ごしたいから人と関わらないようにしてるのであって、本当に人が嫌いってわけじゃないので、ツンデレっていう見方もあながち間違ってるんじゃないんじゃないですかね。知らんけど。

てか……5人と戦わなきゃいけないとか……ハア……（クソデカ溜息）。やめたくくなりますよ。

「荒咬との会話を終えて、僕は律儀に待つてくれた5人の方を向く。」

〈「お話は終わった？」

〈「君達が待ってくれたおかげでね」

〈「そんなに褒めても何も出ませんよお〜？」

〈「あいつは別に褒めてるわけじゃねえぺこだよ」

〈「ですが、一人増えたところで団長達が有利なことには変わりありませんよ！」

〈「このまま勝たせてもらうのです！」

〈「ふうん……僕相手に勝つ気なのか。」

〈「やってみなよ、できるんならね？」

〈僕がそう言った直後、餅つきで使う木槌のようなハンマーを持ったウサ耳の生えた人と、メイスを持った銀髪の人が突っ込んできた。後ろの海賊帽を被った人と金髪の人、それから緑白色の髪の方は、それぞれ二丁の散弾銃と弓矢、黒いオーラを纏った手を構えている。

はい、もうここまで特徴が出れば皆様もうお分かりでしょう。禍津君が最初に戦うのは、ホロライブ三期生の皆さんです。普通なら終盤で出てくる方々なんです、魔ファイアのお二人は運悪く序盤でエンカウトしちゃったようですね。5人に（二人が）勝てるわけないだろ！

さて5名の解説をしたところですが、戦闘中なのでそんな余裕はありません。とりあえずぺこらと団長の攻撃を回避回避回避イ！！

〈「先手必勝（ぺこ）！！」

〈ハンマーとメイスが振り下ろされる直前に後ろに下がる。回避に成功した。

〈「避けてくるのはお見通しですよお！」

〈「これで決める！」

〈後ろから炎の矢と散弾が飛んできた。あの二人が撃ち込んできたものだろう。

おっと……フレアと船長が後ろに回り込んできて攻撃してきました

たね。ですが禍津君にはあれがあるのですよ……翼脚がね。

〈熱っ！ ……チツ、熱い人には未だに慣れないな！

〈先に金髪の人をやったほうがよさそうだ。

ありや、ゴア・マガラの身体でもなかなか硬い翼脚で防御したんですが、思ったよりダメージを貰ってしまいました。後で調べたんですが、ゴア・マガラの翼脚って一番火属性が通るらしいです。出典：MH4G 攻略データベースはーつつかえ！

これは禍津君の言う通り、先にフレアをやるべきですね。不安要素は潰しておくに越したことはありません。そのまま船長もやつちやいましょう。

〈「嘘お!？」

〈「二振りで!？」

〈翼脚で羽ばたき、低空飛行で一気に近づいて翼爪で金髪の人を刈り取る。

〈「がはッ……!？」

〈「フレアっ!!？」

〈海賊帽を被った人が、金髪の人に駆け寄る。

戦いの最中でも同期の心配をするなんて船長は優しいですね。そのまま一緒にやられて、どうぞ（無慈悲）。

〈「させないのです!？」

〈海賊帽を被った人に攻撃しようとした瞬間、何か飛んでくる予感がした。

あっ!? るしあのことを忘れていました! 死霊魔術は当たると色々なデバフがかかって面倒なので、ガードではなく回避します。

〈ドクロの大群が僕の目の前を通りすぎる。間一髪だった。

〈「隙ありぺこおー！」

やべー！ 後ろからぺこらが殴りかかってきました！ 避ける余裕もないので翼脚でガードします！

ガキイン！

なんとか間に合いました。って今度は団長が！ もう片方の翼脚でガードします！

ガキイン！

〈これはまずい状況だ。二人の攻撃を防げたが、両方の翼脚が塞がってしまった。

〈「よくもフレアをやったぺこなー！」

〈「でもやつと間合いに入れました！ ここからはずつと団長達のターンですよ！」

〈銀髪の人がそう言うと、ウサ耳の人は超高速でハンマーを振り始め、銀髪の方は力を込め始めた。

!? やばいやばいやばい！ まさかの合体技ですか!? あかんこれじゃ翼脚が死ぬウー！

〈「ぺーんぺんぺんぺんぺんぺんぺんぺんぺんお!!!」

〈「相手を確実に仕留めるように、一発一発殺意を込めて、打つ！」

〈右からは超高速、左からは一発一発が重い連撃を食らわされる。気を抜くと突破される……！

ちょっと団長なんでそのネタ知ってんですか！ てかマジでやばい！ ガードクラッシュユされちゃう！

何のことか分からない方のために説明すると、ホロラバの戦闘では

こうやってガードすることによって被ダメージを軽減したり無くしたりできるんですが、攻撃をずっとガードしていると『ガードクラッシュ』と言つて一定時間ガードができなくなる状態にされてしまうんですね。

つて言つたそばからガードクラッシュされたあ！

＜怒涛の連続攻撃に耐えきれなくなった翼脚は、ついに弾き飛ばされてしまった。

＜「ここだあー！」

＜翼脚が弾き飛ばされて無防備になった腹部にメイスを突き出され、後方に吹き飛ばされる。

＜「ぐっ……あ……!?!」

＜首を起すと目の前には、ウサ耳の人がいた。

＜「フレアの仇ペこおー！」

＜そう言われた直後、ものすごい速さで顔をハンマーを何度も殴られる。

うつわあ……えぐ……。

＜「ホームラアアアン!! ペこ!!」

あ、吹き飛ばされた。

＜「ふあんでつどさん達、力を貸して欲しいのです！」

＜ウサ耳の人に吹き飛ばされた直後、超巨大なドクロの光砲で身体を焼かれる。

＜「つが……! あああつ……!!」

想像してた以上にヤベエ技だなこれ……。

＜ドクロの光砲により、海賊帽の人の方に吹き飛ばされた。

＜「マリン！ 行けえペコー！」

＜「了解でえす！ ミラクル船長キャノン、撃てえく!!!」

ブヒいいいいいいいい!!! (脊髓反射)

＜どこから持ってきたのか、巨大な大砲からデコレーションされた砲弾が撃ち出され、腹に直撃する。砲弾はそのまま僕を上空に運ぶ。

あつ、これは……。皆さん、ご準備を。

＜「フレアの代わりに、船長が！」

＜海賊帽の人は一丁のライフルを取り出し、砲弾に向かって撃ってくる。弾丸は真っ直ぐ砲弾に向かっていき、砲弾に狙い変わらず着弾した。

＜その直後、強烈な光が僕の視界を埋め尽くした。

皆さん、準備はいいですね？ それではいきますよ……。せーの、

ドドーン!!! パチパチパチ……

へっ、汚え花火だ！

……。というわけで、これが三期生の皆さんの合体技、『ファンタジーの奇跡』です。どんな技なのかは先程見てもらった通りです。団長がメイスで突き飛ばしてペコーがタコ殴り、るしあのがガスターブラスター擬きで焼いて、しまいには船長がミラクル船長キャノンをぶっ放し、最後は本来ならフレアが炎の矢で着火するのですが、今回はダウンしてるので船長が代わりにライフルで着火……。最後の最後に花火として爆発、という見た目は綺麗ですがなかなかえげつねえ技です。

合体技ということでももちろん威力は即死級、火や打撃に対する耐性を高めておかないとまず生き残れないというトンドデモ仕様。そうい

うこともあって本来は三度目のバトルロワイヤル以降で使ってくるようになるのですが、MODを入れた影響で一度目のバトルロワイヤルでも使ってくるようになってるみたいです。

いや、キツくね？ これ流石に禍津君でも駄目でしょ……ゴア・マガラだから火耐性低いし……。あーあ、魔ファイアのお二人の友好度欲しかったなー。

＜「おっしやー！ やったぺこ！」

＜「これで勝利は間違いないのです！」

＜「フレアの敵も取れましたね！」

＜「フレアがやられちゃってどうなるかと思っただけど……なんとか勝ててよかった……」

＜「やれやれ……もう勝ったつもりでいるのかな？」

え？

＜「ツ!? あ、あれ見てください！」



＜海賊帽の人が空を飛ぶ僕を指差し、あとの二人は指差された僕を見て驚いてる。

＜「そんな!? 合体技でもダメペこ!」

＜「いや、結構効いたよ。これだけ派手にやられたのは久々だ。特別に、僕の本気を少しだけ見せてあげる」

お? これはもしかしてもしかすると?

＜僕は地面に降り立ち、目を瞑る。体に力が滾り、僕の頭に禍々しい触角が生えてくる。翼脚が開かれ、自然と地面に着く。

＜そう、これが僕の本気の一部『狂竜化』だ。この先使うつもりはなかったが、気が変わった。今回だけは、思う存分やってやる。

狂竜化きちゃく! これで『今だけ』は狂竜化を使うことができるようになりました。

実はゴア・マガラがベースの主人公の大体は、初期の時点でトラウマスキル『自主リミッター』を持っているため力を自分から使おうとせず、『狂竜ウィルス』関連の技は初期の時点ではほぼ全て使うことができません。

一時的に使えるようになる条件は先程のように、『主人公自ら使用すること』。最初からモンスターの固有能力がバンバン使える他のモンスターと違い、ゴア・マガラはこういう面倒な手順を踏まなくてはならないんですね。トラウマスキルが消えてくれれば、こんな面倒な手順踏まなくてもいいんですが。

今回は予想外の大ダメージを食らったことで、禍津君は本気を出してもいいか、となったのだと思われます。

＜禍々しい咆哮をあげ、僕は4人を睨む。

＜「うう……! 体がピリピリするペこ……!」

＜「これは、一か八か合体技をもう一度食らわせるしか方法はなさそうですね……!」



……はっ!? 団長がとんでもない雄叫びをあげたかと思えばそのまま禍津君に突っ込んで来ました。とりあえず回避と。

〈銀髪の人が突然我を忘れて殴りかかってきた。しかし動きは単調だったので、回避は楽だ。

〈「う”あ”あ”あ”あ!! あ”あ”あ”あ”あ!! あ!! があ”あ”あ”あ!!」

〈「ちよっとノエル!? 急にどうしたんですかあ!?!」

〈「待つペこ! あれは一人じゃ無理ペこ!」

〈「今は落ち着くのです!」

3人が必死に抑えつけようとしてますが、団長持ち前の怪力に負けそうになってます。るしあはともかく、船長とペこらは非力系キャラではないはずですが……。

とりあえず団長を落ち着かせましょう。ゴア・マガラお得意の空中からの突進を仕掛けます。

〈「やべ! マリン、避けるペこ!」

〈「……っ! 逃げ遅れ……あがつ!?!」

突進は団長とするしあに命中しました。2人は吹っ飛ばされて立てそうにありません。

〈「う…………あ…………」

〈「……………こんなの…………無理なの…………です…………」

〈銀髪の人と緑白色の髪の人の方が粒子になって消える。少し威力が強すぎたかな？

あら…………落ち着かせるつもりがKOしてしまいました。やっぱり強すぎんな。

〈「嘘お…………ノエルとするしあまでやられちゃいましたよ…………」

〈「やることは変わらないぺこ。やられちゃった3人のためにも、少しでも順位を上げるぺこ!!」

〈海賊帽を被った人は戦意喪失気味だが、ウサ耳の人はあれだけの實力差を目にしてもまだ戦意喪失していないらしい。ならばお望み通りやってあげようと、地面に着いている翼脚に力を込める。

〈「逃げるが勝ちぺこお!!」

〈「ああつ!? 置いてかないでくださいあい!!」

あつ…………逃げちゃいましたね。

このゲーム、たまに敵が逃げる場合があります。今回はバトロワなのでまた再会するでしょうが、旧魔王軍とかに逃げられると本当に、冗談抜きで面倒なことになるので、逃げられる前にきっちりどめを刺しましょう。(慈悲は) ないです。

〈予想外の展開に体から力が抜け、触角が引っ込んでしまう。2人の方を見ると、荒咬はもちろんいつの間にか目を覚ましていた影山も啞然としていた。

〈「終わったよ。随分と締まらないけど」

〈「お、おう。助かったぜ…………」

「それにしても、お前強えんだな！ 花火になっちまった時は流石に駄目かと思っただけど、5人も相手にして勝てちまうなんてすげえよ！」

「……この2人はさっきのを何とも思っていないのかな？」

おや？

「2人はさっきのを見て、気持ち悪いとか不気味だとか、思わなかったの？」

「さっきのって、あの角のやつ？ 全く思わないぞ？ 強いて言うならすげえ強そうだし、格好いいなって思ったな」

「オレも思わないな。むしろ同じ角が生えてる奴として、親近感が湧いたぞ」

「……」

(気持ち悪いな化け物！ 近づくなよ！)

(頭から角が生えてくるなんて、虫みたいだな！ 気持ち悪いー！)

(あの子、紫色の角が生えてくるんですって。不気味ねえ……)

これは禍津君の過去ですかね？ それにしても予想はしてましたが、禍津君も幼い頃から忌避されてきたみたいですね。

「僕のこの角を見て、悪感情を抱かなかった人は今まで誰一人としていなかった。」

「でも、目の前の2人は何とも思わないどころか、褒めてくれた。」

「この2人ならもしかしたら……」

おお？ これは禍津君が人を信用し始めようとしてますかね？

トロフィー獲得のためにも、ぜひそうしてほしいところですが。

「……何を考えてるんだ僕は。もう二度と人は信用しないって決めただろう。そうだ、人なんてあっさり本性を露にする。この2人

もきつとそうだ。いつその化けの皮が剥がれるか、楽しみだ。

めっちゃ皮肉るやん……。幼い頃に植え付けられたものはそう簡単には拭えないということなんですね……。

それにしても……。団長は何故狂竜化した禍津君を見た途端我を忘れてしまったんでしょうか……。もしかして過去に何かあったとか……？

ということまで……。今回はここまでとなります。次回はバトロワの続きです。

それではご視聴ありがとうございました。団長の挨拶で締めます。おつまつする〜！

## V S ホロライブゲームーズ

何故かホロメンに恨まれてる実況、はーじまーるよー。

今回はホロライブ3期生の皆さんとの戦闘が終わったところから続きです。合体技を食らうというハプニングはありましたが、勝って経験値が大量に手に入ったので結果的にはヨシ！（現場猫） 禍津君が何故か団長に恨まれてるということも知ることができましたし。

〈まだバトルロワイヤルは続いている。どうする？

↓戦って自分から順位を上げる

戦闘を避けて順位が上がるのを待つ

ここで選択肢ですね。前者は戦闘での経験値が手に入るため、早くキャラを育てたいという方におすすめです。後者は戦闘は苦手だけど経験値が欲しいという初心者の方におすすめです。最初は弱いけど後から強くなる晩成型のキャラを使ってる方にもおすすめです。もちろんここは前者一択です。後から、ではなくもう既に強いですからね。戦闘での経験値＋優勝ボーナスを狙います。

〈僕は二人にまだバトルロワイヤルは始まったばかりだと言い、戦って順位を上げようと提案した。

〈「おっ、やっぱそうこなくちやな。正直全然戦い足りてないんだ」

〈「ま、お前は戦闘が始まった瞬間やられたからな」  
〈「いやしようがなくね？ あの銀髪の姉ちゃん、俺がピストルを抜こうとした瞬間殴りかかってきたんだからさ、避けられるわけがねえよ」

ボスは団長の先制攻撃でやられたようですね。団長のステータスは脳筋に脳筋を重ねた超パワー型なので、初期の方だと一発KOされるが多々あります。RTAやってる兄貴達が団長を警戒する理由ですね。

さてここからは経験値という名のモブ達をひたすら狩るだけで  
ので倍速します。その間暇になるみなさまのため  
ボスとオウガさんのステータスについて解説しておきます。

ボスはバトロワが始まる前に本人が言っていたように、二丁の拳銃  
で戦いながらそこに格闘を織り交ぜるといった、いわゆるガン⇄カタ  
というやつです。近距離だと専用スキルの効果もあつて格上相手で  
もある程度やれますが、代わりに中距離か長距離になるとあまり戦力  
になりません。完全近距離型ですね。

スキルは『俊敏』、『射撃』、専用スキルで『獣人マフィアの意地』。  
『俊敏』と『射撃』は言わずもがなスピードを上げるスキルと射撃武器  
の命中精度と威力が上がるスキルですが、専用スキルの『獣人マフィ  
アの意地』は、相手が格上であればあるほど戦闘中自身のステータス  
を増加させるというもの。そのためボス戦でめっちゃめっちゃ活躍して  
くれます。

ただし弱点として、奇襲や先制攻撃には弱いです。先程ボスも少し  
言っていたように、銃を構える前などに攻撃をされてしまうと、ス  
テータス増加が反映されないので思いの外ダメージを食らつてしま  
うことがあります。

また、このゲームはNPCと一緒に鍛練することでNPCが強くな  
るのですが、ボスは鍛えておかないと格下相手には専用スキルが発動  
しないので、負けてしまうことがたまにあります。ので部下の方々は  
しっかりボスと鍛練しましょう。

オウガさんは殴る蹴るの格闘タイプですが、魔界レンタルの大鎌を  
持つとえぐい強化が入ります。斬撃波飛ばしてきたり、デスボみたい  
な咆哮あげながら自身の防御を犠牲に攻撃力を3倍にする『魔人の雄  
叫び』はトラウマものです。本当に味方で助かった……。

ただ、本人も言っていたようにあれはオウガさんが所有しているの  
ではなく、あくまでもレンタルなので、毎回のように使ってくるとい  
うことはないですがね。本当にヤバくなったら使ってきます。

スキルは『怪力』、『耐久』、専用スキルで『魔人の本能』。  
『怪力』と『耐久』は文字通り攻撃と防御を上げるスキルです。専用ス



キルの『魔人の本能』は、防御無視攻撃を除く全ての攻撃で受けるダメージを20%軽減し、HPが残り10%を切るとダメージ軽減がなくなる代わりに攻撃力とスピードを5倍にするスキルです。その上黒っぽい緑のオーラを纏って左目の眼帯が外れ、左目が紅く発光するという見た目変化のおまけ付き。厨二心を撥るぜ！

ですがそういうスキルの性質上、防御無視攻撃に弱いです。またスタミナが少し低めなので、同じパワータイプの敵とやりあわせるとスタミナの差で押しきられてしまうことがあります。持久戦など以ての他です。

さてお二方のステータス紹介をしている間にだいぶモブを狩りまくったので、もうそろそろバトロワも終わりそうです。

＜「だいぶ蹴散らしたなー。これなら優勝ワンチャン狙えんじゃね？」  
＜「油断すんなシエン、本番はこっからだ。バトルロワイヤルは弱え奴等が先にやられてくからな。ここまで残ってるってことはそれなりの実力者ってことだ」

＜まあ、実力者であることは間違いないだろうが、先程の戦闘の結果から僕なら負けることはないだろう。

おつとフラグ建築かな？　とりたいところですが、三期生の皆さんの合体技を食らってもピンピンしてるんで負けるビジョンが見えないというのがプレイヤーである私としての本音です。改めて、このMODやべえな……。

＜「んぎゃああああああああっ!!!」

＜「こんなのってねえペこじやああん!!」

＜最初の方に戦って逃げてしまった二人が僕らの方に飛んでくる。何があったのかを聞く暇もなく、粒子になって消えてしまった。

おや、船長とペこらが何者かにぶっ飛ばされて消えてしまいました。というか、よく生き残ってましたね。もうとつくにやられたもん

だと思ってました。

〈「あれえく？ さつきの二人思ったより強くなかったでなく？」

〈「ころさん出会い頭にぶん殴っちゃうなんてなかなかエグいことするねく？」

〈「向かってきたから反射的に殴っただけだな」

〈「でもあれはどちらかと言うと何かから逃げてたような気もするけどね」

〈「皆さーん、話に夢中になってるところ申し訳ないんですけども、目の前に敵らしき人達が……」

〈雪のように真っ白な髪をした人が、他の3人に僕達の存在を知らせる。それを聞いて3人は僕達の方を向いた。

ゲームーズかよオオオオ!!! (新八)

というわけで続いてはホロライブゲームーズの皆さんとの戦闘です。先駆者兄貴達も悉く苦しめられてきた強敵なので、油断は禁物です。

〈「相手は四人か……おい、誰がどいつの相手をする？」

〈荒咬が聞いてきた。誰の相手をする？

↓犬耳の少女と猫耳の少女

狼の少女と狐の少女

んんんんんんんん??? (理解不能)

なんで二人と戦う必要があるんですか (正論)

しかも選択肢がおかころかフブミオって……。ユニットスキル発動しちやへくう

一応説明しておくユニットスキルというのは、キャラの組み合わせで発動する特殊スキルのことです。人数が多ければ多いほど発動は難しくなりますが、効果がより強力になります。『おかころ』だところさんの攻撃力、おかゆんのスピードが上がり『フブミオ』だとフブ

キングの術ダメージ、ミオしゃの防御力が上がります。ちなみに『魔ファイア』の場合オウガさんの攻撃力とボスの射撃ダメージが上がります。

さてどのペアと戦うかですが、魔ファイアのお二人はどちらも近接型なので遠距離攻撃が得意なフブミオのお二人と戦わせたら負けるのは間違いありません。なので魔ファイアのお二人にはおかこころの相手をしてもらいます。

＜「二人は犬耳の人と猫耳の人の相手をしてくれるかな。あのグローブとダガーとナイフを見る限り、あの二人も近接型だ。僕は黒髪の狼の人と白髪の猫の＜「狐じゃいっ!!」……狐の人の相手をするよ」＜「相性的にも、それが最善だな。シエン、そろそろオレ達もやってやろうぜ」

＜「ここまでほとんどいいとこなしだったからな。マファイアの一人息子の意地見せてやるかねえ？」

＜二人は好戦的な笑みを浮かべながら戦闘態勢に入る。何気に二人のちゃんとした戦闘を見るのは初めてかもしれない。

まあここまでほとんど禍津君が蹴散らしてましたからねえ……。オウガさんもボスも禍津君が討ち漏らしたのをやってるだけでしたし。所詮モブなのでネームドキャラの二人に敵うわけがありませんし。

＜「もしかしてウチとフブキを同時に相手する気？」

＜「ありやま、随分と嘗められたもんですね」

＜「嘗めてるつもりはないよ。君らには僕一人で十分ってことさ」

＜「その態度が！」

＜「嘗めてるようにはか見えませんですよ！」

おっと、先制攻撃してきましたね。

先制攻撃はいつでもできます。ていうかテキトーに撃った攻撃が

敵に命中するかガードされたら、先制攻撃と見なされます。メリットは当たれば体力差ができる、デメリットは問答無用で敵対されることです。

私のように動画は投稿してませんが、バゼルギウスで会場を爆撃しまくって、ホロメン含め出場者全員を敵に回してた人がいましたね……。なんでも、一万以上のNPCと敵対すると獲得できるトロフィーの獲得RTAをしてるとかなんとか……。

ゲームに戻りますが、炎と術が付与された斬撃が飛んで来たのでガードではなく上に飛んで回避します。

▽「ツ！ 飛べるんだ……」

▽「よく狙わないと無駄撃ちさせられちゃいますね……！」

▽狐の人は火、狼の人は素手と鉤爪で戦うようだ。

はい、禍津君の言う通りフブキングは火の妖術、ミオしやはステゴロ+鉤爪というワイルドな戦闘スタイルをとってきます。ミオしやが近接を受け持ってフブキングを守り、フブキングが後ろから妖術で援護射撃+バフ付与という形です。

しかもミオしやは専用スキル『隠しきれない母性』+ユニットスキル『フブミオ』でめっちゃめっちゃ硬くなっています。専用スキルの効果は、仲間がいればいるほど攻撃力&防御力が上がるというもの。シンブルですが強いです。

対してこちらがとる戦闘スタイルは、飛べることを活かしたヒット&アウェイです。ミオしやのHPを少しずつ削って確実に倒します。ミオしやさえ倒してしまえばフブキングは簡単に倒せますからね。フブキングは単体ではそこまで強くありませんが、仲間がいると強さが跳ね上がります。

ここからはちまちま攻撃していくだけです、倍速です。

「そりやつ！」

「オラアツ！」

茶髪の犬耳少女と拳をぶつける。こんな見た目しておきながらオレ並のパワーを持つてるとはな……。

「なかなか強いね？」

「これでも魔人なんぞな。唯一自慢できるパワーで負けるわけにはいかねえんだ。お前、名前は？」

「こおねは戌神こおねだよ」

さつきから思ったが、訛りがすげえなあ……。

「オレは荒咬オウガだ。戌神、オレは女だからって手加減はしねえ派なんだ。負けても文句言うんじゃないぞ？」

「そっちこそ！ こおねが可愛かったから無意識に手加減しちやっただか言っても聞かないかんね！」

――

(そこだ！)

「わわっ!？」

後ろから気配を感じた俺は、後ろに向けて銃を撃った。

「君、なかなかやるね。僕のスピードに着いてくれるなんて」

薄紫色の髪をした猫耳の少女は、空中で体制を立て直して着地するとそう言ってきた。

「これでも、銃弾ぐらいだったら見切れる自信はあるぜ」

じゃねえと銃弾飛び交うマフィア同士の抗争なんて生き残れない

からな。

「ふうん……君、名前は何て言うの?」

「影山シエン。そっちは?」

「僕は猫又おかゆって言うんだ。影山君、少し僕と遊んでくれないかな?」

そういうと猫耳の……猫又は持っているナイフを回しながら聞いてきた。

「よく言うよ、俺に拒否権なんてないだろうに。ま、断る理由もないけど」

「猫アレルギーになっても恨まないでね?」

「俺の天敵は花粉だけで十分だっつーの」

-----

さて、だいぶミオしゃのHPが削れてきました。そろそろフブキングが回復しようとするはずですが……。

〈「はあ……はあ……そろそろキツイかも……!」

〈「待っててくださいミオ! 今回復の術をかけますから!」

狙いどおりフブキングが回復の準備を始めましたね。これでしばらく援護射撃は飛んできません。その間にミオしゃに猛攻を加えていきましよう。

〈「ツ……!?! 急に攻撃が激しくなって……つぐう!」

〈「ミオっ!?! ああもう、早くしてくださいよ!」

……すごいなこれ。普通のキャラだったら回復が追い付かなくなるくらいにダメージを与えていくのが正攻法なのに、回復させること

なく倒せてしまいそうです。

〈「かはっ……ぐめん、もう……無理……」

というわけでミオしゃ戦闘不能です。

〈「そ、そんな?! ……いや、ここで挫けるわけには! 例え一人でも、全力で抵抗させてもらいますっ!」

フブキングが最後の足掻きで炎弾を大量に放ってきました。ですが避けられないことはないです。

〈「先程から見た感じ、あなたはミオの攻撃は受け止めて白上の攻撃は避けてましたね? そこから察するに、火が苦手なんでしょう? これだけの炎、あなたは近づけませんよ!」

〈大した観察眼だ。僕が火に弱いことまで見抜いてきた。

うーんやっぱりいつ見てもこの学習力。このゲーム、AIが戦いながら学習してくるので戦闘の難易度が他のゲームと比べてアホみたいに高いんですね。今回はプレイヤーキャラが特殊なのでそうでもないように見えますが、通常プレイだったら苦戦しけません。ここは逃げ続けましょう。しばらくするとフブキングがスタミナ切れを起こして弾幕が薄くなるはずなのでそこを狙います。

—————

「もう終わり〜?」

「チツ……」

オレと戌神は見合って出方を伺っていた。先程との違いと言えば、オレの息が少し上がっていることと少しダメージが蓄積していることだ。

しばらく戌神と戦ってて分かったが、こいつはパワーだけじゃねえ。めちやめちやタフだ。オレはスタミナが切れてきたつてのに、奴は息が切れる気配すらない。前からネックだったスタミナの少なさを嫌と言うほど感じさせられるぜ。

「ミオしや達が苦戦してるっぽいし、早々に決めさせてもらおうでなー！  
そう言うのと戌神は突っ込んできて、目にも止まらぬ速さでラッシュを打ち込んできた。

「ゆびゆびゆびゆびゆびゆびゆびゆびゆびゆびいー!!!」

「ぐっ………！ うおっ………！ がっ………！」

しかも一発一発の威力が半端じゃねえ………！ 腕でガードしてはいるが、それでもダメージを軽減しきれない。

「おらよー！」

「ぐおおおっ!!」

最後に強烈な一撃を叩き込まれ、俺は吹き飛ぶ。何とか足でブレーキをかけて止まれたが、ラッシュを受け続けてた腕がビリビリして思ったように動かせない。

「しばき上げパンチングラッシュ。こおねの必殺技だよ。腕が動かんでしょ？ これでもうガードできんね」

なるほど、これが狙いだったのか………！

「これでとどめえー！」

オレは避ける体力もなく、腕でガードすることもできず、戌神の一撃を諸に受けた。体が後方に吹っ飛んでいく感覚がする。

そして数秒もしないうちに地面に転がる感触がした。

「いえーい！ 勝利のポーズでなー！」

戌神の勝利を確信したような声が聞こえてくる。始めてだ。ここまで追い詰められたのは。

やっば、すげえよ。世界は広え。

「ふいー。さてと、ミオしや達に加勢しよかー」



「おいおい……もう勝った気でいるのか？」

オレは起き上がりながら言う。

「まだやるん？ そんなボロボロでやっても勝ち目なんか……ッ!」

戌神はオレの方を見て驚いた表情をする。この姿は今まで数えるくらいしか見せたことがない。

「見ろよ、オレはまだまだやれるぜ？」

対してオレは好戦的な笑みを見せてやった。

「それが、本気なん？」

先程のような気楽な喋り方がなくなって、真剣そうな喋りで戌神は聞いてくる。

「ああそうだ。さっきまでのオレとは強さの桁が違うぜ」

今のオレは、左目の眼帯が外れている。加えて体が燃え盛るように熱い。この状態はパワーとスピードが超強化されるがダメージを受けやすい。だから勝負を一瞬で決めないといけねえ。

「この勝負、オレの勝ちだ!」

「勝手に決めんなあ!」

オレと戌神は同時に突っ込む。だが先程よりオレのスピードが明らかに速くなっている。

「ッ! 速っ……!」

拳同士がぶつかり合い、衝撃が走る。

「うわぎゃっ!!」

今度は戌神が吹っ飛ぶ。その隙を俺は見逃さない。直ぐ様吹っ飛んだ戌神を追う。超強化されたスピードであっさり追い付き、追撃で蹴りを放つ。

「うぐえっ!」

戌神はガードできずに諸に食らって再び吹っ飛び、転がる。

「はあ……はあ……こんなん……無理ゲーやん……」

ボロボロになりながらも戌神は立ち上がる。

「それなら降参してくれとありがたいんだけどな。正直女子を痛め付けるのは、流石のオレも気が引けるんだ」

「降参なんてせんよ……! 最後までこおねは戦うかね……!」

負ける可能性しかない戦いにおいても、戌神は戦意を喪失せず最後までやり抜くつもりだ。その姿に、オレは感動すら覚えた。

「いい心意気だ。だけど無理はすんな」

そう言っておレは一瞬で近づいて戌神の首に手刀を叩き込んだ。戌神は糸が切れたように倒れ、しばらくすると粒子になって消えてしまう。

「同級生でこれなんだから、二、三年の先輩はもつと凄えんだろうな」  
燃え過ぎるように熱かった体が冷え、いつの間にか眼帯が戻っている。虚脱感に襲われ、倒れ込むように寝転がったオレは、そんなことを考えるのだった。

「このっ！」

「あぶなくい」

俺が放つ弾丸はまたしても避けられる。猫又はただスピードが速いだけでなく、俺の目線やちよとした動きに合わせて臨機応変に動いている。そして一瞬の間も見逃さない。さっき俺がリロードしようとした時に危うく切られそうになった。気配を感じて咄嗟に体を後ろに倒してなかったら、間違いなく致命傷を負っていただろう。

俺の持っている片方の拳銃は、既に弾切れだ。しかし先程やられかけたこともあって、安易にリロードできない。かと言って銃を使わない格闘は猫又に通用しない。蹴りや拳を放つ前に、距離を取られてしまうからだ。

(このままだと、もう片方もいつか弾が切れる！)

現在はもう片方の拳銃だけで戦っており、こっちも残りの弾が4発と少ない。両方の弾が切れてしまったら、終わりだ。

(待てよ……弾が切れてからリロードなんてしなくてもよくないか？)

そうだ、俺にはあの方法がある。問題は猫又がこれを知っているかどうかだが……今の俺にこれしか方法がない以上賭けるしかない。

まずは普通にマガジンを取り出してリロードしようとする。

(来たな……右か！)

俺は左に転がり、まだ弾が残っている方の銃をリロードする。転がりながらのリロードは、幾度となく練習してきたから余裕でできる。次に右から切りかかってきた猫又に向けて4発発砲する。猫又には1発も命中せず、普通に回避される。

そして転がったときにマガジンを落としたように装い、落ちているマガジンを拾いに行く。すると、

「そこから動かないで」

いつの間にか距離を詰めていた猫又にナイフを眉間に突き付けられる。俺は反射的に銃を猫又に向ける。

「いいのかな？ そんな近づいちゃって。この距離なら流石に外さないぜ？」

「そんなハツタリは効かないよ。今はどっちも弾切れでしょ？」

「チツ」

「僕としては降参して欲しいんだよね。傷つけるのはあんまり好きじゃないから」

猫又は降参を促してくる。落ち着け、まだ撃つタイミングじゃない。

「そうだねえ、俺も痛いのは嫌だし」

そう言いながら俺は銃を下ろし、猫又の足を狙う。

「賢明な判断だね。それじゃそのまま降参して……」

バンツバンツ

「……っが……あつ……!?!」

両足を撃たれた猫又は、立てなくなつてその場に崩れる。俺は後ろに飛び退く。

「タクティカルリロードって知ってるか？ 予期してないタイミングでの弾切れを防ぐために、あえてマガジンに弾が残ってる時にリロードするんだ」

何が起こったのか分かっていない猫又に、俺は説明する。

「じゃあ、そこに落ちてるのは……」

「リロード前のマガジンだ。それにはお前の知ってる通り4発しか弾が入ってない」

「……そつかく、そんな方法があるんだ……」

猫又は「悔しいなく」と言いながら大の字に仰向けになる。

「まあでも、俺が撃った弾の数を記憶して、俺がリロードするタイミングを予想して攻撃する。いい戦い方だったぜ。あのままいつてたら俺が負けてたよ」

「銃を使う人と戦ったことがなかったから、それぐらいしか思い付かなかったんだよね……次戦うときは負けないよ」

「いつでも挑戦しにきな。次は動いてるお前にも当てれるようになってるからな」

そう言うと猫又が粒子になって消えてしまう。それを見届けて、俺は地面に座り込んだ。

「ハア……目では追えるけど、体が追い付かねえ……」

これは俺の長年の課題である。銃弾ですら見切れる動体視力に、体が追い付いていない。先輩には同級生の猫又以上のスピードで動ける人も、間違いなくいるだろう。

「帰ったら特訓しねえとなあ……」

影山組のアジトに戻ったら、特訓しよう。じゃないと先輩にも、禍津にも勝てない。禍津は友達だが、超えるべき壁だとも思っている。禍津のあの戦いを見てから、そう思うんだ。

—————

∨先程より炎が明らかに減ってきている。

よし、ここだあ！ 翼脚でガードしながらタツクルをお見舞いします！

〈「ッ!? そんなの避けれな……ぐほあ!？」

そしてとどめのキック！

〈「うっ、ぐう……これは、完敗ですね……」

やりました！ フブミオ戦勝利です！

〈「おう、やっと終わったか」

〈「見てたんなら加勢して欲しかったんだけど」

〈「足手まといになっちまいそうだったからな。それに、俺達も結構ギリギリだったんだぜ？」

どうやら魔フィアのお二人も勝てたようです。ですがかなりポロポロですね。ころさんとおかゆんはホロメンの中でも普通に強い部類に入りますからね。

〈「どうやら、残ってるのは俺ら含め7人みたいだぜ」

〈「もうそんなに減っていたのか。荒咬が指差している方向を見ると、7(3)と表示された画面があった。荒咬によると7が生存人数、(3)がチーム数を表しているらしい。」

〈「7人のうち3人は俺らとして、あと2チームの中に4人ってことでもいいのか?」

〈「いや、残ってる人数が1人だとしても最初にチームを組んでたらチームとしてカウントされる。2チームが1人ずつであと2人はソロって可能性もある……って思ったが」

〈「こんなとこ禍津ぐらいヤバくねえとソロで生き残るなんてとても

無理だな。多分2人チームが二ついるんだろ」

〽それは誉めてるのだろうか、貶してるのだろうか？

そんなん両方に決まってるでしょ。当たり前だよなあ？ 本来このゲームを三年生まで進めたとしても、火耐性が十分になきゃほぼ即死レベルの三期生の皆さんの合体技を、一年生の前期バトロワで食らってピンピンしてるんですから十分化け物レベルですよ。いや、化け物すら生温いかも……。

〽「だとしても、問題はこのクソ広いフィールドからどうやってたった四人を探すかってことなんだけだな。あくあ、都合よく爆発でも起きてくんねえかなあ〜」

〽「おいおい、そんな都合のいいことが起こるわけ」

ドゴオオオオオオオオオオオン!!!!

〽「……マジ？」

本人が一番驚いてどうすんですかボス……。

〽「ハア……。何はともあれ、探す手間は省けたな。おそらく最後の戦いになる。腹を括るぞ」

オウガさんから腹を括れと言われたところで、今回はここまでです。次回はバトロワ最後の戦闘に入りたいと思います。

それではご試聴ありがとうございました。フブキングの挨拶で締めます。おつこんでしたー！